

日 本 独 文 学 会
秋 季 研 究 発 表 会
要 旨 集

2026 年 10 月 17 日（土）・10 月 18 日（日）

第 1 日 14：10 より（受付開始 12：00～）

第 2 日 10：00 より（受付開始 9：00～）

会場 岡山大学津島キャンパス

一般教育棟 A, B, C 棟（受付：C 棟 1 階）

〒700-0083 岡山県岡山市北区津島中 2-1-1

Okayama University, Tsushima Campus, General Education Building A–C

(Empfang: Gebäude C, Erdgeschoss)

https://www.okayama-u.ac.jp/tp/access/access_4.html

E-Mail: tagung2026okayama@jgg.jp

日 本 独 文 学 会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603

Tel./Fax: 03-5950-1147

E-Mail (メールフォーム)： <http://www.jgg.jp/mailform/buero>

2026 年秋季研究発表会 発表者・発表会場一覧

1 日 目	A 会場 (A41)	B 会場 (B41)	C 会場 (A37)	D 会場 (A36)	E 会場 (A34)	F 会場 (A31)
	開会の挨拶 14:10~14:20					
	シンポジウムⅠ	シンポジウムⅡ	文学、文化・社会Ⅰ	語学、ドイツ語教育Ⅰ	ブース発表	ポスター発表
	神聖ローマ帝国の 現存と残影 14:30~17:30	形式意味論から見 えてくるドイツ語 と日本語の共通 点・相違点 14:30~17:30	Andreas Wistoff 14:30~15:05	宮下 博幸 14:30~15:05	Miki Ikoma u.a. 14:30~16:00	Maria Gabriela Schmidt 13:00~14:30
			Robin Weichert 15:10~15:45	山田 真実 15:10~15:45		
			松尾 匠 15:50~16:25	Anette Schilling 15:50~16:25	Nina Kanematsu 16:00~17:30	信國 萌 13:00~14:30
鈴木 佑紀乃 16:30~17:05			Joachim Scharloth u.a. 16:30~17:05			
懇親会（18：00～20：00）						
2 日 目	A 会場 (A41)	B 会場 (B41)	C 会場 (A37)	D 会場 (A36)	E 会場 (A34)	F 会場 (A31)
	シンポジウムⅢ	シンポジウムⅣ	文学、文化・社会Ⅱ	文学、文化・社会Ⅲ	文学、文化・社会Ⅳ	ポスター発表
	中・東欧と共鳴するドイツ文学 10:00~13:00	Kommunikations- strategien der politischen Rechten in Deutschland 10:00~13:00	野上 俊彦 10:00~10:35	大林 侑平 10:00~10:35	徳永 恭子 10:00~10:35	※ ポスターは期 間中掲示
			石崎 知己 10:40~11:15	綾戸 啓太 10:40~11:15	犬飼 彩乃 10:40~11:15	
			白井 史人 11:20~11:55	杉山 東洋 11:20~11:55	真田 健司 11:20~11:55	
閉会の挨拶						

ドイツ語教育部会 総会 (B32、1 日目 13:15~14:00)

DaF-Café (C31、C32、1 日目 14:30~17:30)

ハラスメント対策 WG ブース (B31、1 日目 14:30~2 日目閉会まで)

第1日 10月17日(土)

シンポジウム I (14:30~17:30)

A会場 (A41)

神聖ローマ帝国の現存と残影
—同時代批評からポスト・エンパイアの記憶へ

司会：伊藤 亮平

本シンポジウムは、神聖ローマ帝国を単一の政治制度や固定した理念として捉えるのではなく、帝国が現実の政治秩序として存在していた中世から、その歴史的記憶が再編される近世・近代に至るまで、文学・言語・学問が「帝国」をいかに意味づけてきたのかを検討する。中心となる問いは、政治的現実と理念との間に生じる緊張が、それぞれの時代にどのように表現され、再構成されたのかという点にある。

神聖ローマ帝国は、普遍的なキリスト教世界とローマ帝国の継承を標榜する一方、諸侯・地域・言語・宗派など複数の政治的・文化的主体を内包していた。本シンポジウムでは、この理念と現実のずれを単なる「衰退」の徴候として理解するのではなく、文学者・思想家・学者が帝国を語り直す契機として捉える。さらに帝国解体後には、その記憶が「失われた帝国」への単純な懐古ではなく、中世、ドイツ語、民族、宗教、文学などを新たな歴史的連続性のなかに位置づける資源となった過程を考察する。

第1・第2発表は、帝国がなお政治的現実であった13世紀初頭を扱う。第1発表はヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの *riče*、*künec*、*keiser*、*lant* などの語彙を分析し、支配者、帝国の状態、土地や帰属に関わる対象が一つの語に一括されず、異なる語彙環境のなかで表現されていることを示す。第2発表は『パルチヴァール』における傷つく身体、信仰、性愛、罪業の表象を検討し、政治的・宗教的緊張が文学的身体表象へと変換される可能性を問う。両発表は、帝国の「現存」を制度史からではなく、同時代文学が政治的・宗教的現実をいかに言語化・身体化したかという側面から捉える。

第3発表はライプニッツの帝国アカデミー構想を通じ、中世以来の歴史・言語文化の記憶が、近代的な学問制度による帝国再構築の資源へ転換される過程を検討する。ここでは帝国の過去が、現在の政治的・文化的秩序を構想するための歴史的根拠となる。

第4・第5発表は帝国崩壊前後の言語・文学観を扱う。第4発表はグリムをライプニッツ、F.シュレーゲルと比較し、帝国という政治的枠組みに代わってドイツ語が民族的連続性を担うという構想と、その内在的矛盾を明らかにする。第5発表はF.シュレーゲルのスベ

イン文学受容を通じ、帝国崩壊後にカトリック的中世がヨーロッパの文化的統一性を表象するモデルへと再構成される様相を検討する。

以上の五発表を通じて、政治的現実としての帝国と、それを意味づける言語・身体・歴史・学問・文学とのずれが、各時代に異なる「帝国」の像を生み出したことを示す。「現存」から「残影」への移行とは帝国の単純な消失ではなく、政治秩序としての帝国が文化的・歴史的記憶へと変換され、新たな秩序や自己理解を構想するための資源となる過程であった。

1. 帝国を語る詩的言語

—ヴァルターの Reichston および Preislied における普遍性と民族性の交錯

伊藤 亮平

ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの格言詩 Spruch については、王位争いにおける立場や政治的機能、「Sänger des Reiches」（帝国の歌い手）としての詩人像をめぐって研究が蓄積されてきた。Richter（1988）、Nolte（1992）はこの詩人像を再検討し、Masser（1974）、Wapnewski（1975）らは第一 Philippston の王権表象を論じている。Goerlitz（2011）は Preislied の tiusch（ドイツの）などを歴史的語義から検討している。

本発表ではこれらを踏まえ、rîche（帝国）を中心に、帝国に関わる対象がどのような語で表されるかに注目する。rîche（帝国）は Reichston で pflege（保護）、verderben（滅亡）、nôt（危機）と結びつき、Unmutston でも帝国の状態が語られる。第一 Philippston では、kūnec（王）はフィリップ本人、keiser（皇帝）は皇帝との血縁関係を示し、rîche は笏と冠を「帝国のもの」と示す。一方、Preislied の lant（国）は site（慣習）、zuht（礼節）、unser（我々の）と結びつく。以上から本発表では、支配者、帝国の状態、土地や「我々」という集団への帰属に関わる対象が一つの語に一括されず、それぞれ異なる言葉との結びつきのなかで表現されていることを示す。

2. 13 世紀宮廷叙事詩における傷つく身体としての帝国イメージの現在性

—アンフォルタスとパルチヴァールの信仰と性愛について

渡邊 徳明

2012 年にバイロイトで上演されたシュテファン・ヘアハイム演出の『パルジファル』では、主人公の苦難がドイツ帝国以降の歴史と重なる。実際、13 世紀初頭にヴォルフラムが書いた『パルチヴァール』は既に、帝国における教皇権と皇帝権の葛藤と調和を身体的に表現した。神と騎士道を崇敬する主人公や伯父アンフォルタスの姿はその具現化でもある。伯父は聖杯を守る一族の王で、異教徒との戦いで得た下腹部の傷の苦痛に苛まれる。伯父を苦しみから救い損ねた主人公もまた、苦しみに満ちた放浪を続ける。それはセラピーの物語でもある(Marshall, 2017)。そして聖杯城は外の世界にも影響を及ぼす(Bumke, 1997)。

「傷つく身体」がキリストの受難を追体験させる(Mertens Fleury, 2010)とか、肉体的な痛みを通じ内面的な苦しみを共有する傾向が騎士文学に現れた(Ridder, 2003)といった

身体論的な見方を本発表も共有する。

アンフォルタスの姿は帝国の身体化であり、下腹部の傷の腐臭は、世俗性を表す。1190年に皇帝フリードリヒ1世が死去して起きた、帝権をめぐる争いは集団的記憶を強めた。集団的な身体記憶は、主体と客体が重なり合うメタな認識を前提とし、罪は集団に共有されている。主人公の母への記憶の抑圧は、背景にある父の不在を暗示させる。当時の帝国は不在の「父」の記憶を抑圧しつつ共有した。

3. 中世の記憶と帝国の文化的復権

—帝国アカデミー設立をめぐるライプニッツの戦略

山崎 明日香

ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ（1646–1716）のウィーンにおける帝国科学アカデミー設立の諸提言（1713–1716、未刊行稿含む）では、人文科学が特に重視されている。ライプニッツは、中世ドイツ語圏の歴史文化や言語の記憶を引き出し、近代化の遅れたハプスブルク帝国の現状を批判的に捉えた。彼は、普遍的な科学的知見を基盤とする近代的統治機構の確立を提言し、当時衰退していた帝国の再構築を目指した。

ライプニッツは同提言の中で、中世以来のハプスブルク家の家系調査を通じて、歴史的な統治の正当性と支配秩序の強化を主張しただけではなく、その最高職に聖職者を据えることで、中世以来の学術の伝統的権威と宗教的正統性の確保を求めた。これによって彼は帝国科学アカデミーを、神聖ローマ帝国全体を象徴し包含する機関として提示し、皇帝権の庇護を獲得しようとした。

また、ライプニッツの同構想で重視されたドイツ語（ゲルマン語）には、古代から現代までの言語史的な連続性に価値が置かれ、世襲領地での育成と教育を通じた帝国運営強化が図られた。この構想は、アカデミーでの「真のドイツ語辞典・語彙集」編纂提言(1712)と相俟って、プロイセンと協働した「広大なドイツ諸邦共同体」(Hamann 1973)を見据えた展望でもあった。

本発表では、ライプニッツが帝国の復権を構想する中で、中世の歴史と言語文化を支配権力の源泉とみなし、帝国運営の強化や、帝國的アイデンティティ回復を意図していたことを明らかにする。

4. G. W. ライプニッツと F. シュレーゲルとの比較を通して見た J. グリムの言語観

嶋崎 啓

J. グリムは、神聖ローマ帝国を崩壊させたナポレオンを敵視したが、帝国を理想郷として懐古したわけではない。彼が求めたのは、帝国の背後にある理念としてのドイツである。もともと分裂した状態にあり、ナポレオンによってさらに危機的状況に陥ったドイツを統合する役割を担うのが、グリムにとってはドイツ語であった。

G. W. ライプニッツは「原初の言語」に近いドイツ語を重視し、その改良によって統合を図ろうとした。しかし一方ドイツのみならず、包括的な世界の融和を求めている彼は、言語の違いを越えて視覚的に理解可能な漢字を評価し、また数学的記号による普遍言語を構想した。

F. シュレーゲルが「インド人の言語と英知について」を出版したのは、帝国崩壊 2 年後の 1808 年であった。サンスクリットの称揚の根底にはヨーロッパ中心主義があったが、結局は異教のインド文化への関心を失い、シュレーゲルはカトリックに傾倒する。

ライプニッツとシュレーゲルにおいては、理想的な言語が観念的もしくは過ぎ去った過去のものであったが、グリムの理想とした言語は生きる現実社会で使用されるドイツ語である。それは様々な異物を取り込んだ歴史的な産物でありながら、民族の紐帯として純粋であらねばならなかった。本発表は、普遍主義のライプニッツやヨーロッパ主義のシュレーゲルと比較することによって、ドイツ主義のグリムの言語観に新たな光を当てたい。

5. フリードリヒ・シュレーゲルのスペインとカトリック中世のイメージ —『古代と近代文学の歴史』を手がかりに

幅野 民生

本発表ではフリードリヒ・シュレーゲルのスペイン文学受容が彼の思想的変遷に伴ってカトリック的歴史観および帝国像と結びつく過程を考察する。初期ロマン派期にはセルバンテスの『ドン・キホーテ』が彼の関心の中心を占め、その「幻想的な機知」や「熱狂とイロニーとの驚くべき永遠の交替」が評価されていた。パリ移住後、シュレーゲルのスペイン文学への関心はその美学的・詩論的側面からカトリック的性格へと広がり、とりわけカルデロンのカトリック的な演劇が彼を強く惹き寄せるようになる。こうした文学研究と並行して 1805 年前後から本格化する歴史研究においても、スペインは極めて重視される。シュレーゲルは、長期に渡るレコンキスタを通じて「騎士精神と宗教性」が緊密に結びついたスペイン固有の国民的性格が形成されたと論じ、さらにカール 5 世のもとで成立した「スペインとドイツの結合」に、諸国民が権利と自由を保持しながらキリスト教の下に結ばれた連邦的な帝国秩序の可能性を見いだしている。こうした歴史研究の成果は 1812 年にウィーンで行われた文学史講義『古代と近代文学の歴史』に流れ込み、スペイン文学は騎士的な精神を最も長く保持した国民文学として、シュレーゲルのカトリック的・オーストリア的文学史構想のなかで極めて重要な位置を占めることになる。

シンポジウム II (14:30~17:30)

B 会場 (B41)

形式意味論から見えてくるドイツ語と日本語の共通点・相違点

司会：小林 大志

我が国のドイツ語研究においてドイツ語と日本語の対照研究は重要なテーマのひとつであり、まとまった成果としては Narita, Ogawa & Oya (Hrsg.) (2005) や、Neue Beiträge zur Germanistik (159 巻) の Sonderthema: Deutsche Grammatik - Herausforderung aus kontrastiver Sicht に収められている一連の論文 (Tanaka 2019, Oya 2019, Nishina 2019, Miyashita 2019 など) が挙げられる。これらにおいては機能主義、語彙意味論、認知言語学など多様な枠組みでそれぞれ対照研究がなされているが、複数のトピックに対しひとつのアプローチの下で日独対照を行う大々的な試みは、これまであまり無かったように思える。本シンポジウムでは、共通のアプローチとして形式意味論を選択し、そこから見えてくる日独語の共通点・相違点を浮き彫りにすることを目指す。

ドイツはいわば形式意味論大国であり、Arnim von Stechow、Angelika Kratzer、Irene Heim、Thomas Ede Zimmermann、Manfred Krifka、Kai von Fintel といった、世界的な形式意味論の研究者を直接・間接に輩出してきた。また、Kratzer & Shimoyama (2002) の自由選択表現、Mori (2005) のコンテクスト転換、Tanaka, Mizutani & Solt (2019) の同等比較構文、Sode & Sugawara (2021) の伝聞表現に関する研究などで、日独対照においても形式意味論によるアプローチが有効であることがすでに示されている。

本シンポジウムでは形式的なドイツ語研究を行っている 3 名 (小林、岡野、伊藤) に加え、形式意味論を専門としつつ主に日本語の研究を行っている 2 名 (水谷、井原) を招き、形式意味論を共通の枠組みとしてドイツ語と日本語の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。司会・コメンテーターは小林が務め、伊藤・井原・岡野・水谷はパネラーとしてそれぞれのテーマで発表を行う。いずれの発表においても、ドイツ語と日本語のデータ双方が議論されると同時に、形式意味論の前提知識がない聴衆にも配慮した形で分析が提示される。

伊藤発表では、ドイツ語の接続法 2 式が日本語の丁寧の「た」との対比も交えつつ扱われる。発話行為と接続法 II 式の意味を合成的に捉えることで、接続法 II 式の多様な用法を統一的に捉える分析が提案される。井原発表では、ドイツ語と日本語の心態詞・終助詞の観察から、その生起は語用論的な制限に動機づけられるものではないことが示され、談話構造に着目した代替分析が提案される。岡野発表では、ドイツ語の damit 文と日本語のタメ文の時制分布と意味解釈を扱う。両者とも過去形の主文下で現在形が使用可能という共通点から出発し、可能な時制形式や解釈の差を合成的な意味分析によって捉えられることを主張する。水谷発表では、否定極性を示す焦点辞であるドイツ語の auch nur と日本語の「までは」に着目する。そして、auch nur に関する Guerzoni (2003) と Crnić (2011) の分析を比較し、「までは」の存在が後者の分析を間接的に支持しうることについて論じる。このように本シンポジウムでは、形式意味論を共通のプラットフォームに据え、そこから見

えてくるドイツ語と日本語の共通点・相違点に関して新たな知見をもたらすことを目指す。

1. ドイツ語の接続法Ⅱ式の多様な用法の形式意味論による分析：日本語との対照を交えて

伊藤 克将

ドイツ語の接続法Ⅱ式には、(1)のような非現実話法のほかに、(2)のような外交的接続法や、(3)のような特殊な用法も存在する。

(1) Wenn Peter das Abitur geschafft **hätte**, **hätte** er Linguistik studiert. (Kasper 1987: 98)

(2) a. **Könnten** Sie mir sagen, wie spät es ist? (Heidoph et al. 1984: 533)

b. Ich **hätte** gern einen Silvaner, bitte. (Duden 2016: 533)

(3) Da **wären** wir endlich! (Duden 2016: 533)

(3)の用法は、安堵・満足・歓喜などを表すとされており (vgl. 在間 2006: 99、中山 2019: 222、田中&バウアー 2024: 248)、外交的接続法と並んで非現実話法とは区別して記述されることが多い (vgl. Duden 2016: 533, Heidoph et al. 1984: 533, Hentschel & Weydt 2013: 109)。本発表では、Kasper (1987)、Fujinawa (2006)、Csipak (2020)といった先行研究を検討した上で、(1)-(3)の接続法Ⅱ式の用法にできるだけ統一的な分析を提案することを目的とする。発音されない条件文を想定するという Kasper (1987)の路線を取りつつ、Ebert et al. (2014)や Krifka (2014)によるビスケット条件文 (例: Wenn du Hunger hast, da sind Kekse auf dem Tisch.) の分析に基づき主文に発話行為オペレーターを想定し、そのオペレーターに接続法Ⅱ式の意味が加わることで(2)や(3)のような用法における解釈が導出されるという分析を提案する。形式意味論の枠組みを用いて分析することで、一見特殊にも思える(3)のような用法も、発話行為と接続法Ⅱ式の意味から合成的にその解釈を導出できることを示す。また、日本語との対比として「お支払いは現金でよろしかったですか」におけるタ(「バイト敬語 / マニュアル敬語」のタ、vgl. 井上 2017)を取り上げ、形式意味論による分析によって見えてくるドイツ語の接続法Ⅱ式と日本語のタとの共通点・相違点を議論する。

2. 談話助詞の生起を動機づける語用論的原理とは何か：日本語とドイツ語の観察を通じて

井原 駿

伝統的に、前提を担う語彙の生起を規定する語用論的原理として Maximize Presupposition! (MP) が注目されてきた。MP は、真理条件的に等価だが前提の強さが異なる表現が選択可能な場合、最も強い前提を持つ表現を選べという原理である。本研究は日独の談話助詞を観察し、その生起に MP は作用せず、別のメカニズムで動機づけられるべきだ

と主張する。Grosz (2010; 2014) は、独語の ja と doch がともに「異論の不在」の前提を持ち、doch はさらに「修正」の前提を持つことから両者を競合関係とみなし、後者の前提が満たされる文脈では MP により doch が要求されるとした。しかし、両者が交換可能な文脈の存在 (Büring 2017) や同一文中での共起 (Müller 2018) から、この分析は維持できない。日本語の「よ」は「聞き手が注目すべきことが文脈上にある」前提を持ち (McCready 2009)、MP は前提が満たされれば「よ」を義務的と予測する。しかし、呼格表現を用いると前提が満たされても「よ」は義務的でなくなり、MP は誤った予測を導く。以上より、両言語で MP は談話助詞の生起を予測できないと結論づけ、「議論下の疑問」(Roberts 1996) の観点から談話助詞の振る舞いを再検討する。本研究は談話の語用論的現象も形式意味論の射程にあることを示し、個別言語の事実が理論に与える帰結を論じる。

3. 非時間的副詞文の時制解釈：ドイツ語 damit 文・日本語タメ文への態度的アプローチ

岡野 伸哉

ドイツ語の damit 文と日本語のタメ文は、ともに行為の目的を表す定形文であり、主文が過去形／タ形でも、過去から見た未来の目的を現在形／ル形で表せる：

- (1) a. Er küsste sie, damit sie ihn heiratet. [Frühauf (2024: 26), 下線発表者]
b. 花子は大阪に行くため切符を買った。

一方で、damit 文には過去形が現れうるのに対し、タメ文は「目的」解釈でタ形を許さない。また、タメ文は damit 文と異なり「原因」を表す用法をもつ：

- (2) a. Ich beeilte mich, damit ich rechtzeitig hinkam. [Brandt & Rosengren (1983: 154), 下線発表者]
b. #花子は大阪に行ったため切符を買った。 [「目的」解釈不可能]
c. 雨が降ったため、地面がぬかるんだ。 [「原因」解釈のみ可能]

本発表では、damit/タメ文を態度述語の補文と同様の環境とみなし、埋め込まれた現在時制の評価時がローカルに束縛されると分析することで、過去形主文下での現在形による目的解釈を導く。さらに、目的文に欲求・願望の態度述語を暗黙に想定する分析 (Frühauf 2022, 2024; Grano 2023) と、態度述語に時間的指向性をもたせる分析 (Akuzawa & Kubota 2024) を組み合わせ、暗黙述語の未来指向とタ形の相対的過去指向の衝突から、目的のタメ文でのタ形の不可能性を説明する。これに対し、ドイツ語の過去形は絶対的解釈が可能なため衝突を回避できると論じる。また、タメ文の原因用法も、目的文に因果関係を想定する分析と並行的に捉える。本発表は、非時間的副詞節の時制解釈の分析を通じ、形式意味論の合成的ア

プローチが両言語の共通点と相違点を捉える上で有効であることを示す。

4. 日本語・ドイツ語の焦点辞が示す否定極性について

水谷 謙太

様々な言語において、単独の焦点辞 (focus particle) や複数の焦点辞の組み合わせが否定極性 (negative polarity) を示す。例えば、ドイツ語では焦点辞 *auch* と *nur* の組み合わせが否定極性を示す (Guerzoni 2003, Schwarz 2005, Crnić 2011)。

(1) a. *Auch nur [der Hans]_F war da.

b. Niemand hat auch nur [die Maria]_F begrüßt. (Guerzoni 2003: 165, 168, 一部表記変更)

この事実に関して二つの分析が提案されている。Guerzoni (2003) は、*auch* を英語の *also* に対応する累加的 (additive) 焦点辞、*nur* を *only/just* に対応する排他的 (exclusive) 焦点辞とする。そして、両者の相反する要求を満たすために否定表現が必要であることから、*auch nur* の否定極性を説明する。Crnić (2011) は、*auch* を作用域内命題の蓋然性が低いことを要求する英語の *even* に対応する焦点辞、*nur* を作用域内命題の蓋然性が最も高いことを要求する焦点辞とし、両者の要求が否定表現なしに両立しないことから否定極性を導出する。

興味深いことに、同種の現象は日本語でも観察される。井戸 (2017, 2018) が指摘するように、焦点辞「まで」と「は」の組み合わせは否定極性を示す。

(2) 子どもの喧嘩で、警察までは{*来た/来なかった}。 (井戸 2017: 2)

Mizutani (2023) は、「まで」を英語の *even* に対応する焦点辞、Sawada (2007) に従い「は」を作用域内命題の蓋然性が最も高いことを要求する焦点辞とみなし、これらの相反する要求から「までは」の否定極性を説明している。

Mizutani (2023)を踏まえ、本発表では「までは」の存在が Crnić (2011) の分析を間接的に支持しうること、同分析のほうが焦点辞の否定極性に関する通言語的パターンを適切に捉えやすいことを論じる。また、Nakanishi (2007) が指摘する「だけでも」の特異な振る舞いも考慮し、関連する焦点辞を比較することが、焦点辞に関する意味的普遍性 (semantic universal; von Fintel and Matthewson 2004) の解明に寄与することを論じる。

口頭発表：文学、文化・社会 I (14:30～17:05)

C 会場 (A37)

1. Verschmelzende Welten, Zeiten, Realitäten. Erzählerische Durchdringungen der Dimensionen bei „Air“ (2025) und früheren Prosawerken Christian Krachts

Andreas Wistoff

Christian Kracht zählt zu den bedeutendsten, intensiv erforschten Gegenwartsautoren. „Air“ ist Krachts virtuosester Roman; irritierende Handlungsabläufe und Realitäten, das Spiel verstörender Wirklichkeiten sind scheinbar einzigartig. Die vergleichende Zusammenstellung von Interpretationen seiner früheren Werke ergibt, dass schon vom ersten Werk an durchgängige Erzählstrategien und Themen bestehen. *Reisen, Verschwinden, verfließende Dimensionen, nicht-existierende Individualität als Text-Konstituenten sind erkennbar als Konstanten in Krachts Gesamtwerk.* „Air“ wird somit erfassbar als Variation genereller Erzählweisen Krachts. Forschungen von Jahraus, Schumacher, Conter, Röttel u.a. lieferten schon vor 20 Jahren Erkenntnisse, die erhellend für vieles zunächst Rätselhafte in „Air“ sind. „Air“ ist jedoch mehr als eine Variation früherer Strukturen, denn Kracht erreicht hier den Höhepunkt seines Erzählens auf einer prinzipiell neuartigen Stufe: *Die Auflösung von raumzeitlichen und dimensional Parametern ist die radikale Fortführung dessen, das bereits mit „Faserland“ begann.* Das Nicht-Vorhandensein eines personalen Individuums - bei „Faserland“ sichtbar im Ausstaffieren mit Konsumartikeln, deren Image die Hauptperson identitätsstiftend einzusetzen versucht, ohne dass damit ihre Leere beseitigt würde - führt bei „Air“ zur Aufspaltung der Figuren in verschiedenartige unvollständige Existenzen. Deren Leere ist in Spiegelungen ihrer Welten und Dimensionen bis zur Unfassbarkeit fortgeschrieben. Sogar die Konstruktion der Geschehnisse ist ent-individualisiert, als unvollkommene Re-Konstruktion von Erinnerungen, Fragmenten und Figuren, anscheinend weitgehend generiert von einer Daten-Cloud. *„Air“ ist ein prominentes Werk aktueller, post-historischer Ästhetik.*

2. Entstellung und entstellen. Zur grammatischen Differenz eines Wortes bei Freud und Benjamin

Robin Weichert

Der Frage nach der Rezeption Freudscher Schriften und der Übernahme Freudscher Begriffe durch Benjamin hat sich die Forschung wiederholt gewidmet (Weigel 1997, Lindner 2016, Werner 2019). Dagegen sieht der Vortrag von einer genealogischen Beziehung ab und richtet das Augenmerk stattdessen auf den Sprachgebrauch beider Autoren. Er konzentriert sich auf ein Wort — Entstellung, entstellen —, das in seinem textuellen Zusammenhang in der *Traumdeutung* auf der einen und in dem Stück „Die Mummerehlen“ aus der *Berliner Kindheit* auf der anderen Seite erörtert wird. Dabei tritt eine

grammatische Differenz hervor, die zugleich auf theoretische Verschiebungen deutet. Freud bedient sich sprachlicher Mittel — insbesondere des morphologischen Kontrasts von ver- und ent- —, um „Entstellung“ als einen Fachterminus zu etablieren, der einen subjektlosen, aber zielgerichteten psychischen Mechanismus von außen benennt. Demgegenüber wird „entstellen“ bei Benjamin nicht als Begriff arretiert, der auf eine Operation außerhalb seiner selbst zeigt, sondern nimmt als Wort im Text selbst an der Bewegung teil, die es bezeichnet. Und wo „Entstellung“ bei Freud ein Hindernis ist, das die Deutung überwinden muss, um den Sinn des Traums zu entdecken, ist Entstellen bei Benjamin selbst schon der Modus von Lektüre und Welterschließung.

3. 個人語 (Individualsprache) の孤独

—マウトナーの言語批判とホーフマンスタール『チャンドス書簡』における言語的閉域

松尾 匠

本発表は、フリッツ・マウトナーの個人語 (Individualsprache) テーゼと、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールの『チャンドス書簡』 (1902) との関連性を、「独我論的閉域」という概念軸から論証することを目的とする。

マウトナーは、『言語批判論考』 (1901–02) において言語の意味は各人の感覚に由来するがゆえに、同一の語が話者ごとに異なる意味理解を持つと主張した。これにより、表面上の言語的な意味理解の共有は真の相互理解を保証せず、各人は自らの個人語の内に閉じられるという帰結が導かれる。本発表では、この構造を便宜的に「独我論的閉域」と呼ぶ。

本発表のテーゼは、チャンドス卿の言語崩壊体験が、この「独我論的閉域」の文学的表象として読解できるというものである。チャンドス卿が抽象語の使用能力を喪失し「口の中で朽ちた茸のように崩れ落ちてゆく」と告白する体験は、単なる美的な言語不信ではなく、個人語テーゼに内在する他者との真の相互理解の不可能性を、一人称的告白の形式で文学的に表現したものである。先行研究 (木村 2013、大宮 2013、Saße 1977) を踏まえつつ、本発表は個人語テーゼの論理構造と『チャンドス書簡』のテキストとを直接対照させる論証に特化する。

4. A.デーブリーン『最初の回顧』における過去のトラウマ体験を語ること

鈴木 佑紀乃

本発表は、アルフレート・デーブリーンによる自伝的作品『最初の回顧』 (Erster Rückblick, 1928) を、作中人物による過去のトラウマを語る行為に注目しながら論じるものである。本作は大きく三つの区分からなる。前半では一人称の「私」が、幼少期に出奔した父を中心に家族の思い出を語る。中盤には、ある委員会がデーブリーンを調査するという設定のもと、彼に関する様々なデータが提示されるほか、それに続いて挿入される戯曲で、彼がギム

ナジウムで教師から受けた嫌がらせが明かされ、それに関する委員会とのやり取りが展開される。そして終盤では、唐突に連続殺人犯ジャックの社会馴化の物語が語られる。

先行研究では、作中で言及される父の家出や教師からの虐待といったトラウマ体験に触れながら、精神分析と結びつけた解釈 (Hartmann, 2008) や他のデーブリン作品との比較 (Genz, 2013) がされている。本発表では、これらの研究を踏まえつつ、作中人物によってなされるトラウマを語る行為に着目する。この語りは、内容の現実らしさを追求する点で、作者デーブリンが 1910-20 年代に志向した「叙事的な」物語叙述の詩学に通じる。そのような現実性を損なわない語りは、その生成過程で、語りの主体が、直面した現実に新たな意味を付与することから、トラウマ体験による傷を和らげる可能性が見いだせる。さらに、終盤のジャックのエピソードにも注目し、彼が衝動的な殺人をやめ社会に適応するさまが、本作の前半及び中盤でのトラウマを語る過程と対応することを示す。

口頭発表：語学、ドイツ語教育 I (14:30~17:05)

D 会場 (A 36)

1. ドイツ語における自動詞構文による拡張：構文文法的アプローチ

宮下 博幸

日本語と同じく、ドイツ語においても他動詞が目的語なしで用いられる現象が見られる。次の B の発話では、他動詞 lesen が目的語の ein Buch なしに用いられていると想定可能である。

(1) A: Was machst du gerade?

B: Ich lese.

このような現象は多くの研究で他動詞の目的語の省略とされる。これは Goldberg (1995) などの構文文法的な研究においても基本的に同様である。これに対し、Erben (1980) などのように、この現象を他動詞の「自動詞化 (Intransitivierung)」とみなす立場もある。これは他動詞が自動詞構文で使われたものとする立場である。構文文法的な研究においても、Welke (2019) は結合化減少の手段として自動詞構文の使用を挙げている。本発表はこの「自動詞化」の立場を、構文文法の枠組みに依拠してさらに推し進めるものである。

目的語が出現しない場合には、他動詞の用法では見られない動作の焦点化や属性化といった、異なる意味が見られることがある。

(2) a. Er sitzt im Café und schreibt.

b. Was macht er von Beruf? Er schreibt.

(2a)では主語 er の書く行為自体が焦点化されており、(1b)では書くことを職業にしているという主語 er の属性が述べられている。これらの例においては schreiben が他動詞として使用される場合とは異なった前景化が見られ、またこれらは目的語の有無によらず文の意

味は不変とする立場の問題となる。本発表では構文文法の立場から [NP_{NOM} V] という形式を持つ自動詞構文自体に独自の意味があるとみなし、その意味と他動詞の意味のフレームとの融合を想定することで、他動詞が目的語を伴わずに出現するケースの説明を試みる。また自動詞構文の想定により、(2)のような例も適切に説明可能であると論じる。

2. ドイツ語学習者の L2-WTC とコミュニケーションスタイルとの関係性

山田 真実

本発表では、日本におけるドイツ語学習者の L2-WTC とコミュニケーションスタイルとの関連性について実施した調査の報告を行う。

日本国内の L2-WTC 研究は 1990 年頃より開始され、外国語学習者の目標言語でのコミュニケーション意欲及びそれへの影響要因について調査がなされてきた。またその際、日本は他国と比較してもコミュニケーションに対し消極的であるという事例がしばしば報告されてきた。こうした現象の背景の一つとして、異文化コミュニケーション研究の観点からは、アジア圏などでは間接的なコミュニケーションスタイルが、欧米圏では直接的なコミュニケーションスタイルが、それぞれ支配的であることが関与していると考えられる。上述の観点に基づき、本調査では日本国内のドイツ語学習者を対象として実施した L2-WTC 及びコミュニケーションスタイル（直接／間接スタイル）に関するアンケート調査の結果を計量的に分析することを通じ、学習者のコミュニケーションスタイルの実相及びコミュニケーションスタイルと L2-WTC との関連性を明らかにしようとした。調査の結果、ドイツ語学習者は直接スタイルより間接スタイルの傾向を有するが概ね両方のスタイルを同程度使用すること、また相関分析より二つのスタイル間に「コミュニケーションスキル一般」のような共通領域が存在する可能性が示唆された。さらに、重回帰分析の結果から「コミュニケーションスキル一般」が L2-WTC に対し主要な説明力を持つものの、社会性の高い「一斉授業」という場での L2-WTC には、間接スタイルが有意な関連性を示すことが明らかとなった。

3. Was Studierende von *Effi Briest* lernen können – Literarische Texte im handlungsorientierten Unterricht

Anette Schilling

Der 2020 auf Deutsch erschienene „Begleitband“ zum *Gemeinsamen Europäischen Referenzrahmen für Sprachen* (Europarat 2020) nahm vermehrt die Behandlung von Literatur und kreativen Texten in den Blick und stellte dafür erstmals Kompetenzskalen zur Verfügung. Diese beschrieben vor allem die Fähigkeit der Lernenden zur Mediation, also die Fertigkeiten, Textinhalte zu verstehen, zusammenzufassen und an andere weiterzugeben. Der Vortrag möchte die Aufmerksamkeit dagegen auf die Merkmale der ästhetischen Gestaltung und die sprachlichen Mittel literarischer und kreativer Texte lenken und plädiert dafür, diese in die unterrichtliche Behandlung einzubeziehen, um den Lernenden die

„Gemachtheit“ von Texten und die Mittel der Bedeutungsherstellung bewusst zu machen. Die Fähigkeit zum „Durchschauen“ der Texterstellung kann – so die These – auch auf andere Textsorten übertragen werden und fördert somit die allgemeine kritische Lesefähigkeit der Studierenden. Damit knüpft die Verfasserin an Studien zum Einsatz literarischer Texte im DaF-Unterricht u. a. von Hallet (2007), Kramsch (2011), Küster/Lütge (2015) und Hille/ Schiedermaier (2021; 2024) an. Der Vortrag schließt mit einem Unterrichtsvorschlag zu „Effi Briest“ von Theodor Fontane.

4. Lernerzentrierung im Digital Game-based Language Learning: Eine Bestandsaufnahme am Beispiel der DaF-Lernspiele des Goethe-Instituts

Joachim Scharloth, Carsten Waychert u. Christoph Petermann

Digitale Spiele eignen sich aufgrund ihrer Prozeduralität in besonderer Weise für lernendenzentrierte Bildungsprozesse. Ihre Funktionsweise beruht darauf, dass Regeln, Objekte und Mechaniken dynamisch verknüpft sind und sich fortlaufend gegenseitig beeinflussen. Diese prozedurale Struktur bildet ein System ab, das durch Handlungen exploriert werden kann und einen Lernraum schafft, in dem Lernende nicht nur Inhalte vermittelt bekommen, sondern über systemische Rückmeldeschleifen selbst Erkenntnisse generieren, Lernwege aktiv gestalten können und somit „Agency“ erlangen. Sprachlernspiele können auch so gestaltet werden, dass sie adaptiv auf Spielende reagieren — etwa durch variable Schwierigkeitsgrade, alternative Lösungswege oder dynamische narrative Verzweigungen. Ein lernendenzentriertes Spieldesign nutzt solche Mechanismen, um Lernende in ihrem eigenen Tempo, mit ihren eigenen Strategien und in Bezug auf ihre eigenen Ziele zu unterstützen.

In unserem Vortrag bestimmen wir zunächst den Begriff der Lernendenzentrierung im Hinblick auf das Design von Sprachlernspielen und differenzieren unterschiedliche Dimensionen von Agency in Lernspielen. Dann stellen wir ein Beschreibungs- und Analyseraster für Sprachlernspiele zur Diskussion, das von uns im Rahmen des vom DAAD geförderten Projekts "GameBaseDaF" erarbeitet wurde. Im dritten Teil des Vortrags werden wir dieses Raster schließlich auf die vom Goethe-Institut angebotenen Sprachlernspiele anwenden.

ブース発表 (14:30～17:30)

E 会場 (A34)

1. Zur Prosodie der Reduplikation im Deutschen. Ergebnisse aus dem

DAAD-Universität-Projekt „ProsPrag (Prosodie und Pragmatik)“

**Miki Ikoma, Yoshiyuki Muroi, Joachim Scharloth,
Ulrike Freywald u. Horst Simon**

Im Kabinenvortrag präsentieren wir Ergebnisse des DAAD-Waseda-Projekts „ProsPrag“. Es zielt darauf ab, Forschende der Freien Universität Berlin, der Universität Münster und der Waseda-Universität zusammenzubringen, um die Forschungsfrage zu beantworten: „Inwieweit wird die pragmatische Interpretation eines sprachlichen Ausdrucks durch seine prosodische Form beeinflusst?“

Im Fokus unseres Kabinenvortrags stehen neue empirische Befunde zu prosodischen Merkmalen morphologischer Reduplikation im Deutschen. Wir fragen, ob die pragmatisch gestützte Interpretation eines Worts wie *Chefchef* als Reduplikation ‘ein Chef im eigentlichen Sinne’ oder als Determinativkompositum ‘Chef des Chefs’ (auch) prosodisch determiniert ist. Ob es sich hier um einen Subtyp der Komposition oder um Reduplikation als eigenständigen morphologischen Prozess handelt, ist eine theoretisch zu klärende Frage. Empirisch zu klären ist jedoch, ob es prosodische Marker gibt, die anzeigen, ob das Wort mit Prototypenbedeutung oder mit Determinativbedeutung zu interpretieren ist. Hierzu liegen kaum empirische Studien vor.

Um Wortakzent-Unterschiede zu ermitteln, haben wir Produktionsexperimente mit deutschen Muttersprachler:innen durchgeführt, in denen Reduplikationen und Determinativkomposita mit derselben Oberflächenform vorkamen, sodass ein direkter Vergleich möglich ist.

Unsere Hypothese lautet, dass prosodische Unterschiede nicht die Position, sondern die Qualität und/oder Quantität des Akzents betreffen. Im Vortrag präsentieren wir zunächst Ergebnisse der akustischen Analyse und diskutieren anschließend unter Einbeziehung des Publikums Implikationen für künftige Forschungsschritte.

2. Dynamic Assessment in mündlichen DaF-Prüfungen an japanischen Universitäten – Konzeption einer Pilotstudie und erste Erkenntnisse eines aktionsforschungsorientierten Promotionsprojekts

Nina Kanematsu

Dynamic Assessment (DA) verbindet Leistungsdiagnostik und Förderung, indem gezielte Unterstützung in den Bewertungsprozess einbezogen und die Reaktion der Lernenden auf diese Unterstützung diagnostisch genutzt wird. Während DA international bereits in unterschiedlichen Fremdsprachenkontexten untersucht wurde, liegen auch für Japan erste Arbeiten, insbesondere im Bereich Englisch als Fremdsprache, vor. Der Einsatz von DA im universitären DaF-Unterricht in Japan ist hingegen bislang kaum erforscht.

Die Kabinenpräsentation stellt erste explorative Analysen einer Pilotstudie zu DA in

mündlichen DaF-Prüfungen an einer japanischen Universität vor. Die Pilotstudie dient der Erprobung und Weiterentwicklung des DA-orientierten Prüfungsformats sowie der Reflexion der eigenen Diagnose- und Interaktionspraxis. Untersucht werden ausgewählte Interaktionssequenzen hinsichtlich auftretender sprachlicher oder inhaltlicher Schwierigkeiten, der Mediation der Lehrperson, der Reaktion des Lernenden und der weiteren Interaktionsgestaltung. Das aktionsforschungsorientierte Projekt nimmt dabei sowohl die Responsivität der Lernenden als auch das eigene Interaktionshandeln der Lehrperson in den Blick.

Aus den bisherigen Analysen werden zwei vorläufige Thesen zur Diskussion gestellt: Eine nach der Mediation inhaltlich passende Reaktion lässt nicht zwangsläufig darauf schließen, dass die zugrunde liegende Schwierigkeit tatsächlich geklärt wurde. Zudem wird das diagnostisch Beobachtbare durch das Interaktionshandeln der Lehrperson mitbestimmt. Daraus ergibt sich die Frage, wie diagnostische Vertiefung, Unterstützung und weitere Anforderungen der laufenden Prüfungsinteraktion ausbalanciert werden können.

ポスター発表 (13:00~14:30)

F 会場 (A31)

1. Emotionen und Fremdsprachenerwerb - Chancen und Grenzen der Aufgabenstellung

Maria Gabriela Schmidt

Diese Posterpräsentation ist ein Werkstattbericht mit der These: Emotionen sind im Fremdsprachenunterricht (FSU) selbstverständlich, die Forschung fokussiert jedoch eher auf negative Emotionen, in Japan vor allem Studien zu Angst (*anxiety*, Prüfungsangst oder Sprehangst beim Englischen). Die Posterpräsentation fasst Studien in Auswahl zusammen und widmet sich weiteren emotionalen Aspekten mit besonderem Fokus auf die Aufgabenstellung im universitären FSU. Übungen und Aufgaben richten oft den Blick auf sprachliche Fertigkeiten (Grammatik oder Wortschatz) sowie die Richtigkeit der sprachlichen Zielfertigkeiten. Die hier zugrundeliegende Frage ist: Lässt eine Anpassung der Übungsaufgaben, die Lernende individuell oder kollaborativ während des Unterrichts durchführen, nicht nur ihre zielsprachlichen Fertigkeiten sondern auch damit verbundene Emotionen und Einstellungen wahrnehmen bzw. ausdrücken? Zur thematischen Abgrenzung ist zu betonen, dass nicht Motivationsforschung sondern der mögliche Radius der Aufgabenstellung im Bezug zum fremdsprachlichen Spracherwerb ermittelt wird, um individuelle sowie kulturelle Aspekte und Wahrnehmungen einzubeziehen. Bisher sind dazu

relativ wenig Studien im Bereich DaF erschienen, die positive Emotionen bzw. Emotionen im weiteren Sinne im Rahmen des FSU (Lehrende und Lernende) behandeln. Die meisten beziehen sich auf Englisch und den internationalen Kontext (siehe Dewaele, 2010; Helgesen, 2016; Cullen & Backwell, 2018; Sambanis & Ludwig, 2025; Mercer & Gregersen, 2026). Aktuelle Studien werden zusammengefasst und einbezogen.

2. ドイツ語の評価形容詞 schön と gut の補文選択と trope 制限 —zu 不定詞句への拡張可能性

信國 萌

ドイツ語の評価形容詞 schön と gut は、補文を主語にとる形容詞述語文において異なる統語的・意味的ふるまいを示す。本発表では、Maienborn (2020) の trope 理論と Fechner (1876) の美的／実際的カテゴリーの区別を組み合わせた信國 (2025) の枠組みに基づき、両形容詞の補文選択の違いを、評価対象となる事態の事実的前提の強弱の差として捉える可能性を検討する。

先行調査では、IDS コーパスを用いて dass 文および wenn 文を主語として取る形容詞述語文を分析した。その結果、事態の成立が前提される補文 (dass 文) と前提されない補文 (wenn 文) の分布などにおいて、両形容詞の間に体系的な差異が確認された。これらの結果は、gut が事態の成立が前提される補文との親和性を示す一方、schön は事態の成立が前提されない補文との親和性を示すという仮説と整合的である。

しかし、この調査では zu 不定詞句を分析対象から除外していた。zu 不定詞句は定形補文と同じく es ist schön/gut, ... という構文によく現れるが、その意味的性質は定形補文と必ずしも一致しない。そのため、補文選択に関する上記の仮説が補文構文全体に妥当するかどうかは、まだ検討の余地がある。

そこで、本発表では分析対象を zu 不定詞句へ拡張し、定形補文との対応関係を踏まえながら、両形容詞がどのような zu 不定詞句と共起するのかを予備的に調査する。そのうえで、定形補文で観察された差異が zu 不定詞句にも認められるのかを検討し、trope 制限の枠組みが補文構文一般にどこまで適用可能であるかについて考察するための手掛かりとしたい。

第 2 日 10 月 18 日 (日)

シンポジウム III (10:00～13:00)

A 会場 (A41)

中・東欧と共鳴するドイツ文学 —ボブロフスキーの「サルマチア」の地詩学を手がかりにして

司会：関口 裕昭

コメンテーター：井上 暁子

2022 年のロシアによるウクライナ侵攻以来、東欧での軍事的緊張が高まっている。この地域は歴史を見ても戦乱が絶えず、第二次世界大戦まではドイツがその火種となっていた。その不幸な「ドイツ人と東欧諸民族の関係」を自身の従軍体験もふまえてテーマにしたのが、旧東プロイセン出身の詩人ヨハネス・ボブロフスキー(1917-1965)であった。彼は東プロイセンを中心にポーランド、リトアニア、ロシア西部から北欧に至る一帯を「サルマチア」と呼び、その風土と歴史と文化遺産を文学テーマの中心においた。

このサルマチアは、近年、国際政治を論じる際によく用いられる、軍事的な意味の強い「地政学」に抵抗する、諸民族の融和をめざす新たな「地詩学」的概念としても有効であるように思われる。地詩学(Geopoetics)は、スコットランドの詩人ケネス・ホホワイトが提唱した新しい地理学の概念であるが、ここでは文学と歴史に重点を置き、「サルマチア」の詩学の根幹をなすものとして再定義したい。

本シンポジウムはボブロフスキーの文学的業績を再検討しながら、まだ十分に吟味されてこなかった彼の「サルマチア」の詩学を、中・東欧の専門研究者の見解も取り入れながらより広い視点から検証し、国境と言語に縛られてきた従来の文学研究を、周縁の地域・人々・歴史を含めたより広いものへと拡大したいと考えている。その際、ボブロフスキーの文学観でも重要なカギを握る、多言語・多文化性、中心と周縁、ユダヤ性といった概念も重要となるだろう。

ボブロフスキー研究は 1965 年の詩人の没後から本格化し、国際シンポジウムも各地で開かれた。東欧の研究者もこれらに参加したが、各国でのボブロフスキー受容の紹介にとどまっており、その後も新しい成果は少ない。その一方で、2017 年にボブロフスキーの全書簡が刊行されるなど、資料面の充実は目を見張るものがあり、これらの新資料を駆使した新しい研究が望まれている。加えて近年の国際情勢の変化もあって、ドイツ、バルト三国、ポーランドなどの地域と歴史を俯瞰した新しい文学研究への期待も高まっている。

このような背景から、本シンポジウムでは中・東欧の文学研究者 2 名—チェコ文学研究の阿部賢一(東京大学)、ポーランド文化研究の松尾梨沙(早稲田大学高等研究所)(敬称略、以下同)—も参加し、さらにドイツ・東欧文学の研究者、井上暁子(熊本大学)をコメンテーターに迎えて、ドイツ文学と中・東欧文学の知られざるつながりや問題をボブロフスキーの文学を通して再発見し、サルマチアを中心とした地詩学的な観点からあらたな文学研究の糸口を探りたい。

なお、登壇者の研究領域は多様で、テーマも中東欧諸国にまたがるので、統一的なテーマ

を見失なわないために、ボブロフスキーのテキスト(「ペトル・ベズルチ」、「ミツキェヴィッチ」等)に沿った具体的な分析・議論も合わせて行いたい。

1. ボブロフスキーとリトアニア

関口 裕昭

ボブロフスキーの故郷ティルジット(現ロシア領ソビエツク)はリトアニアとの国境にあり、彼は子供のころ毎夏リトアニア側の祖母の家で過ごしたので、リトアニアの歴史や文化にもかなり通じていた。本発表では、マールバッハの文学資料館にあるボブロフスキーの遺稿も参照しながら、彼とリトアニアとの関係を探る。

考察の中心となるのは、最後の長編『リトアニアのピアノ』(1965)である。これは1936年のナチス侵攻直前のリトアニアを舞台に、三人の人物がリトアニアの国民詩人ドネライティス(1714-1780)を主人公にしたオペラを制作しようとする小説である。物語は18世紀と20世紀を融通無碍に往復し、両国の歴史を検証しながら警告を鳴らす構成になっている。

先行研究は、ライストナー(1981)による「作者の全作品の芸術的総決算であり要約」から、ベーレ(2005)の解釈「ドイツとリトアニアの関係の出会いと責任についての自己主張」に至るまで幾つかある。

本発表ではこれらの解釈史を振り返りながら、十分に考察されてこなかったドネライティスや作曲家・画家チュルリョーニス(1875-1911)からの影響を具体的に検証する。さらに小説のテーマである三位一体の詩学(主人公が3人、残されたピアノも3台など)をキリスト教への信仰告白、文学・美術・音楽の一体化、さらにはドイツ・ポーランド・リトアニアなどの三者の一体化への期待という視点から解釈し直し、ボブロフスキーのサルマチアという「地詩学」の本質に迫りたい。

2. 故郷喪失者としての想起 ―グラスとボブロフスキーの場合

依岡 隆児

ギュンター・グラスとボブロフスキーの関係を故郷喪失という観点からとらえ、その東欧の多民族・多文化性に裏打ちされた想起のあり方について考える。

スラブ系少数民族の母を持ち多民族的な環境に育ち、戦後、故郷ダンツィヒを追われたグラスは、小説『鈴蛙の呼び声』(Unkenrufe, 1992)で、この地を追われた人とヴィリニウス(ヴィルノ)を追われここに来た人双方のために墓地を作るという事業を通して、故郷喪失者のために想起の場を作った。彼はここで、周縁に位置し、失われた多民族的な世界を想起することで、ドイツを相対化する視点を保持していた。一方、ボブロフスキーのサルマチアも、かつて存在した民族を単に回顧する地ではなく、想起の中で顕現する多民族・多文化的な地だった。

こうした想起のあり方について、ここではグラスとノーベル賞作家ミウォシュならびに

シンボルスカとの 2000 年のヴィリニウスでの会合「想起の未来」を加味して考える。この会合では、現リトアニアの首都は戦後ここを追われて故郷を喪失した者たちの記憶を新たに作る場となり、参加者それぞれが自らの故郷を想起し、それを未来に結び付けようとした。そして、こうした想起において詩的な力を呼び出す故郷喪失者の一人としてボブロフスキーの名が挙げられている。本発表では、こうしたグラス、ボブロフスキーら東欧ゆかりの詩人たちに通底する故郷喪失者の想起のあり方を検証したい。

3. ドイツ語圏におけるペトル・ベズルチの受容

— ルドルフ・フクスとヨハネス・ボロフスキーを中心に —

阿部 賢一

詩人ペトル・ベズルチ(Petr Bezruč, 1867-1958)による『シレジアの唄』(*Slezské písně*, 1903)は、チェコで広く愛読されてきた詩集である。チェコ語話者の意識を強く刺激する同詩集は、方言の使用による地方文化の尊重、労働者の貧困の社会問題などによって、チェコの民族運動を牽引する一冊として位置づけられてきた。興味深いことに、この愛郷的な詩集はドイツ語圏においても積極的な受容がなされてきた。1916年、ユダヤ系詩人、翻訳家ルドルフ・フクス(1890-1942)がドイツ語に訳出し、翌年に刊行された第二版ではフランツ・ヴェルフェル(1890-1945)が序文を寄せ、「ベズルチとは、滅びゆく一族が発する、個人を超越し、説明し難い、最後の叫びである」と絶賛している(*Die Schlesischen Lieder des Petr Bezruč*. Leipzig: Kult Wolf, 1917, S. 5)。1937年刊の増補版では、「意に反した詩人」と題された長文の序文をフクスが寄せている。これらの翻訳の序文に共通するのは、ベズルチの特権的な位置づけである。

第二次世界大戦後もベズルチの受容は継続していく。「サルマチア」を提唱したヨハネス・ボブロフスキー(1917-1965)は詩編「ペトル・ベズルチ」を1961年に発表し、シレジアの詩人のオマージュを捧げている。

本報告では、ベズルチの受容について、ルドルフ・フクスの翻訳、さらにはボブロフスキーの詩篇を通して考察していくと同時に多文化的なシレジアに仮託されたものは何かについても並行して検討を加えていきたい。

4. 「サルマチア」の功罪 — ミツキエヴィチ文学を中心に —

松尾 梨沙

戦後、東プロイセンの視点から想像されたボブロフスキの「サルマチア」は、ポーランド、リトアニア、ロシア西部から北欧に至る一帯を指し、民族・文化の多層性とその歴史的記憶を謳うものであった。本発表の前半ではそれを念頭に、リトアニア出身のポーランド語詩人アダム・ミツキエヴィチ(1798-1855)が故郷ヴィルニウスを詠んだ最初期の詩「街の冬」(1818)を取り上げ、ボブロフスキの詩「ミツキエヴィチ」(1961)を参考にしつつ、両者に重なる「サルマチア」への郷愁を追ってみたい。

一方、「サルマチア」という語自体は元タイラン系遊牧民を指す名称で、その勢力が中央ユーラシアからドナウ川下流域まで拡大したものであった。のちにシュラフタ（ポーランド貴族）が自分たちを「勇猛な古代の騎馬民族サルマチア人の後裔」と見なし、当時ポーランド＝リトアニア領域にあったルーシをも含めてシュラフタの一体化を強めるためにこの語を用い、結果この一帯の「ポーランド化」を促すことに繋がった。よって本発表の後半では逆説的に、帝国主義的な抑圧関係を彷彿とさせる「サルマチア」について、まずはフリデリク・ショパン（1810-49）作曲《リトアニアの歌》（1830-31）と、続いてミツキエヴィチ『父祖の祭』第Ⅲ部（1832）より第7場「ワルシャワのサロン」を通して考察する。以上から「サルマチア」の功罪について検討したい。

シンポジウム IV（10:00～13:00）

B 会場（B41）

Kommunikationsstrategien der politischen Rechten in Deutschland

司会：Joachim Scharloth

Rechte und neurechte Ideologie, Politik und Parteien gewinnen global an Popularität und Einfluss – auch in Deutschland. Rechte Gruppierungen und Medien dominieren das politische Vorfeld durch starke öffentliche Präsenz und in der Parteipolitik ist die AfD auf dem Weg, in Umfragen stärkste politische Kraft zu werden. Diese Erfolge stehen im Kontext einer Medienlandschaft, die durch Disintermediation und ein Überangebot an Informationen und Informationsquellen charakterisiert ist. Die Deutungshoheit traditioneller „diskursive[r] Eliten“ und öffentlich-rechtlicher Medien ist längst nicht mehr selbstverständlich. Dies kommt rechten Akteur:innen und Parteien zugute, die eine Art ‚Gegenöffentlichkeit‘ mit eigenen Medienangeboten etablieren. Sie sind ein wichtiges Mittel zur Erlangung kultureller Hegemonie in einem vermeintlichen Kulturkampf, der durch die Resonanzkalküle der Polarisierung, der Skandalisierung und der Herabwürdigung unter der Maske der Selbstverharmlosung geführt wird. Dieses Streben nach kultureller Hegemonie manifestiert sich sprachlich sowie durch andere Modalitäten.

Gegenstand des Symposiums „Kommunikationsstrategien der politischen Rechten in Deutschland“ sind ebenjene Kommunikationsformen und -strategien (mono- wie multimodal), die für diese Konstruktion einer rechten Gegenöffentlichkeit von Relevanz sind. Die Vorträge behandeln verschiedene Medien und Modalitäten, die sowohl im vorpolitischen als auch im parteipolitischen Feld zu verorten sind und geben somit einen umfassenden Überblick über die mehrgleisigen Strategien der (Neuen) Rechten im Kampf um Deutungshoheit:

Christina Liemann fokussiert in ihrem Vortrag ein gruppenspezifisches Netzwerk

multimodaler Metaphern in ‚rechts-alternativen‘ YouTube-Videos. Der Vortrag von Joachim Scharloth und Christina Liemann thematisiert die Darstellung von Japan als Projektionsfläche für rechte Idealvorstellungen in sozialen Medien und rechten Publikationen. Hagen Steinhauer befasst sich mit dem Angriff auf historisch-politische Bildung, welcher unter der Prämisse vermeintlicher Neutralität revisionistische Geschichtspolitik im außerschulischen Bildungsbereich zu etablieren sucht. Joachim Scharloth untersucht in seinem Vortrag Invektivität als Modalität der Neuen Rechten anhand der Rassifizierung von Muslime. Zuletzt geben Christoph Petermann und Carsten Waychert einen Ausblick in die Möglichkeiten der Didaktisierung von rechter Hassrede im Deutschunterricht in Japan. Das Symposium bietet somit zum einen einen umfassenden Überblick über verschiedene kommunikative Strategien der Rechten in Deutschland, zeigt aber auch deren Vernetzungen und Schnittmengen auf und gibt einen Anstoß zur Anwendung dieser Erkenntnisse in der Bildung in Japan.

1. Vernunft gegen Wahnsinn: Konstruktion einer polarisierten Gesellschaft durch multimodale Metaphern

Christina Liemann

Neben parteipolitischen Bestrebungen ist die (Neue) Rechte in Deutschland auch auf Social Media Plattformen erfolgreich aktiv. Auf YouTube hat sich eine rechte Gegenöffentlichkeit gebildet, die sich aus zahlreichen Kanälen mit Teils beachtlicher Reichweite zusammensetzt. Der Vortrag arbeitet die innerhalb dieser rechten Gegenöffentlichkeit genutzten gruppenspezifischen Metaphern heraus und rekonstruiert die durch sie aufgebaute, polarisierte Wirklichkeit: Die Gesamtgesellschaft wird als der Unvernunft verfallen und zum rationalen Diskurs nicht mehr befähigt konstruiert, während es vermeintlich einen nur kleinen Kreis Vernunftbegabter rechter Akteur:innen gibt, die die Realität so erkennen wie sie ist. Genutzt werden für diese Konstruktion verschiedene Quellbereiche/Input Spaces (bspw. Clown, Wahnsinn, Medizin), deren analoge Strukturierung und Vernetzungen zu einem ‚metaphorischen Szenario‘ (Kuck 2018, 254) ebenfalls rekonstruiert werden.

Die Analyse erfolgt qualitativ, greift methodisch auf das Metaphern-Konzept von Lakoff und Johnson (1980) zurück und kombiniert dieses mit der Blending-Theorie von Fauconnier und Turner (2002). Die Analyse ist multimodal angelegt und basiert auf dem Mehrebenenmodell von Zeichenmodalität von Stöckl (2016).

Datengrundlage des Vortrags ist ein Teilkorpus bestehend aus 114 YouTube-Videos. Entnommen ist dies einem Gesamtkorpus aus 410 Videos von 44 YouTube-Kanälen, welches im Rahmen des Promotionsprojekts „Wirklichkeiten durchsetzen. Kommunikationsmuster ‚rechts-alternativer‘ Influencer auf YouTube“ zusammengestellten

wurde. Der Vortrag präsentiert einen Auszug aus diesem Projekt.

2. Das bessere Deutschland? Japan-Bilder in der Neuen Rechten und ihre politischen Implikationen

Christina Liemann & Joachim Scharloth

Der Vortrag analysiert die Instrumentalisierung Japans als idealisierte und homogenisierte Projektionsfläche für nationalistische Ideologie durch die deutsche (Neue) Rechte. Dargestellt werden Ergebnisse aus dem JSPS-geförderten Projekt „The Better Germany: Images of Japan in the German New Right and Their Political Implication“.

Das Projekt geht von der These aus, dass Japan von der deutschen Rechten als ‚besseres Deutschland‘ konstruiert und zum kritischen Ideal eines vermeintlich seine Identität verlierenden Deutschlands stilisiert wird.

Der Vortrag geht der Frage nach, mittels welcher sprachlicher und anders modaler Zeichen dieses idealisierte ‚Nationalbild‘ (Nafroth 2002) Japans konstruiert wird, welche Aspekte es umfasst und welche Aspekte Deutschlands dadurch kritisiert werden sollen.

Die Analyse folgt einem mixed method approach: In der quantitativen Analyse werden Semantisierungen des Nomens Japan und verwandter Lexeme durch Word Embeddings, Topic Models und Kollokationsanalysen untersucht. Die qualitative multimodale Analyse fokussiert rekurrent genutzte Argumentationsmuster sowie die verschiedenmodalen semiotischen Ressourcen, durch die diese realisiert werden.

Das der Studie zugrundeliegende Korpus umfasst einerseits einflussreiche rechte Publikationen (*Sezession*, *Compact*, *Die Achse des Guten*, *Tichys Einblick* und *PI-News*) mit Japan-Bezug, andererseits auch Daten aus Social-Media-Plattformen wie *YouTube* und *X*.

3. „Rassismus ohne Rasse?“ - Invektivität als Modalität der Neuen Rechten am Beispiel der Rassifizierung von Muslimen

Joachim Scharloth

Der Vortrag entfaltet Invektivität als typische Modalität in rechten Onlinediskursen. Dies wird anhand einer spezifischen Form sprachlicher Herabsetzung illustriert: der Rassifizierung von Musliminnen und Muslimen, untersucht am Beispiel von Online-Debatten während der sogenannten Flüchtlingskrise (2013–2017). Mit dem Konzept der Rassifizierung werden dabei kommunikative Praktiken erfasst, durch die Personengruppen als eine abgegrenzte, essenzialisierte Gruppe innerhalb der engen Semantik von „Rasse“ konstruiert werden.

Der Vortrag argumentiert, dass Feindseligkeit gegenüber Musliminnen und Muslimen nicht hinreichend mit dem Paradigma der Islamophobie erfasst werden kann. Stattdessen nutzt die Studie das Paradigma des antimuslimischen Rassismus, um aufzuzeigen, wie

„neuer“ kultureller Rassismus auf „altem“ biologischem Rassismus beruht.

Durch die Analyse eines umfassenden Korpus von 275 Millionen Wörtern aus 27 rechten und rechtsextremen Online-Medien untersucht der Vortrag, wie Musliminnen und Muslime explizit und implizit von einer religiösen Gemeinschaft als eine rassifizierte Bevölkerungsgruppe konstruiert werden.

Methodisch verbindet der Beitrag distributionelle Semantik (Word Embeddings) und Nominationsanalyse, korpusbasierte Analysen von Komposita sowie korpusgetriebene Auswertungen von Aufzählungen. Die Ergebnisse zeigen, dass selbst dann, wenn religiöse Terminologie verwendet wird, diese in einen biologisch-essenzialistischen Rahmen eingebettet ist.

4. Entpolitisierung und Ideologisierung: Die soft-autoritäre Geschichtspolitik der Neuen Rechten

Hagen Steinhauer

Der Vortrag analysiert ein Korpus aus AfD-Parteiprogrammen, Bundestagsdebatten, Medienberichten und PR-Kommunikaten zur sogenannten Neutralitätspflicht sowie zur kultur- und geschichtspolitischen Positionierung der Neuen Rechten. Methodisch wird mit Verfahren der linguistischen Diskursanalyse sowie ethnografischen Interviews gearbeitet. Im Anschluss an bisherige Forschung zum Soft *Authoritarianism*, die die schleichende Normalisierung autoritärer Ideologien innerhalb liberaler Demokratien beschreibt (Steinhauer 2025; Adam et al. 2022), sowie an Arbeiten zur metapolitischen Strategie der Rechten, analysiert der Beitrag den Diskurs über die Politisierung von Zivilgesellschaft und Ideologisierung von Erinnerungspolitik, die von der Forderung nach mehr Patriotismus bis hin zu direkten Angriffen auf Gedenkstätten reichen.

Der Vortrag vertritt drei Thesen: (1) Die gleichzeitige Forderung nach Neutralität zivilgesellschaftlicher Akteur*innen und die gezielte Ideologisierung kulturpolitischer Felder sind keine Gegensätze, sondern komplementäre Instrumente eines kohärenten, soft autoritären Projekts, das liberal-demokratische Deutungshoheit verschiebt. (2) Konkrete Kampagnen – etwa die AfD Initiative gegen „Schule ohne Rassismus – Schule mit Courage“, der Vorwurf eines „Nationalmasochismus“ und die Forderung nach patriotischer Kulturpolitik – markieren kritische Bildungsarbeit als illegitim und verschieben die Grenze legitimer Positionierung. (3) Parallel wird die Gegenvision einer patriotischen Geschichtspolitik aufgebaut, die positive Vergangenheitsbezüge zur Identitätsstiftung nutzt und damit gezielt das kulturelle Feld politisiert. Abschließend werden die Konsequenzen für eine demokratische Zivilgesellschaft sowie deren Reaktionen auf diese Angriffe diskutiert.

5. Hassrede: Didaktische Zugänge im DaF-Unterricht an japanischen Hochschulen

Christoph Petermann & Carsten Waychert

Hassrede als Kommunikationsstrategie der politischen Rechten ist Gegenstand intensiver gesellschaftlicher, politischer und medialer Debatten im deutschsprachigen Raum. Zugleich gibt es keine einheitliche Definition des Begriffs, und die Einordnung konkreter Äußerungen hängt nicht allein von einzelnen Wörtern oder Formulierungen, sondern von pragmatischen Faktoren und ihrem diskursiven Kontext ab. Der Vortrag diskutiert, wie diese Komplexität im DaF-Unterricht an japanischen Hochschulen didaktisch aufgegriffen werden kann.

Er knüpft dabei einerseits an sprachwissenschaftliche Arbeiten zu Definitionen von Hassrede und zur Kontextabhängigkeit sprachlicher Herabwürdigung (Meibauer 2026; Scharloth 2023), andererseits an fremdsprachendidaktische Ansätze zur Behandlung kontroverser gesellschaftlicher Themen an (Ludwig & Summer 2023). Auf dieser Grundlage werden anhand ausgewählter Beispiele aus politischen, medialen und digitalen Diskursen Didaktisierungsansätze für unterschiedliche Sprachniveaus vorgestellt, in die auch die Unterrichtserfahrungen der Vortragenden aus dem japanischen Hochschulkontext einfließen. Vertreten wird die These, dass gerade die Uneindeutigkeit des Begriffs „Hassrede“ und die Kontextabhängigkeit sprachlicher Bedeutung kein Hindernis für den Unterricht darstellen, sondern selbst didaktisch genutzt werden können. Lernende können etwa untersuchen, mit welchen sprachlichen Mitteln Zugehörigkeit und Ausgrenzung konstruiert werden und welche Kriterien zur Bewertung konkreter Äußerungen herangezogen werden. So lassen sich sprachliche Analyse, die Reflexion über sprachlich vermittelte Normen und Wertvorstellungen sowie landeskundliche Perspektiven auf aktuelle gesellschaftliche Debatten miteinander verbinden.

口頭発表：文学、文化・社会Ⅱ（10:00～11:55）

C 会場（A 37）

1. 労働者論三部作に見るエルンスト・ユンガーの対抗近代主義

野上 俊彦

エルンスト・ユンガーは、『労働者』（1932年）、『時代の壁際で』（1959年）、『極大・極小』（1964年）の三書を『著作集』第6巻（1964年）にまとめ、これに「労働者」のタイトルを付している。しかしこの労働者論三部作がひとまとまりの作品として取り上げられることはなく、それらが全体としてどのような考えを表現しているかについての定説もまだない。

ユンガーはその全著作を通じて近代人を主人公とする「近代の哲学的叙事詩」を描いたのだと考える Koslowski (1991)は、『労働者』と『時代の壁際で』をセットで検討し、そこに行動的・自己救済的な近代人の出立と挫折のドラマを見ている。この解釈は、ユンガーの思想のスケールの大きさや揺らぎをうまく捉えている一方で、その基礎にあるドイツ人としての彼の国民的自負心を見落としているように思われる。

発表者の理解では、労働者論三部作は「ドイツ人による世界救済の夢」の語りである。ここでユンガーは、西洋主導の所与の近代のあり方と批判的に対峙しながら、ドイツ人が主導する別種の近代のあり方を構想したのであり、Herzinger (1994)が提示した「ドイツの対抗近代主義」の概念で捉えるのが適当である。

本発表では、労働者論三部作の中に、ユンガーの理想の世界像とドイツ人像、ナチ時代の経験がこの理想に与えたダメージとそこからの回復の試みを読み取ることを通じて、上の仮説を検証することにしたい。

2. ヴォルフガング・ヒルビッヒ『投影』におけるイデオロギーのふたつの姿

石崎 知己

東独で労働者として生きたヴォルフガング・ヒルビッヒの作品では権力支配が二重の姿で描かれる。一方では、関係性のなかに拡散した局所的で匿名的な権力。しかし他方で彼は明快な理由もなくそれを実体的な独裁権力（全体主義国家）と結びつけてしまう。こうした作品の性格のために、これまでの研究では相反する二つの支配の様相が区別されずに論じられてきた。つまり、現実を歪曲するイデオロギーの強制としても、現代のイデオロギー論が扱うような、行為において作用する、権力関係の再生産を担う個人の主体化という意味でも論じられており、その両者の関係が問われなくなっているのだ。

本発表では上記の性格が最も凝縮された 1989 年の長編『投影』を取り上げる。本作では作家に事件を捏造させるシュタージの計画に巻き込まれた語り手が社会主義イデオロギーの虚構性を告発する。その一方で彼は書くという行為を肉体労働の語彙で記述することにより、作家が陰謀の生産に無意識に加担する機制を分業による支配として遂行的に解明してもいる。しかし彼はそれを国家による強制と取り違えてしまうために、自分が支配の機制を知っているということに気づかない。自身で機能させている支配を外的な強制であるかのように錯覚すること。ここに第二のイデオロギーが現れている。社会主義はこの取り違えの結果として現れる想像上の補完物であり、両者の関係は不透明なのである。この不透明さが本作の言語の矛盾や分裂として現れることを明らかにする。

3. ゲルト・ホフマン『映画をかたる男』における無声映画の参照と語りの技法の関連

白井 史人

ゲルト・ホフマン『映画をかたる男 *Der Kinoerzähler*』（1990）は、ケムニッツ近郊の村

リンバッハを舞台に、少年時代の作家とその祖父をモデルとした一人称小説である。祖父やその周辺の会話や回想が引用として豊富に挿入される自伝的な形式を取り、活動写真弁士を務める祖父カールは、トーキー映画の普及によって失職して失意のなかで暮らすうちに、次第にナチ集会に惹きつけられていく。

本作は、欧米では映画史の初期に失われたとされる活動写真弁士の存在を小説に組み込んでいる。ただし、先行研究においてレックが指摘する通り（2008）、ホフマンの作品の多くは写実性と幻想性、歴史性とフィクション性といった矛盾する要素を内包している。本作の自伝的な記述もその実証は難しく、弁士の存在を通して社会と芸術家との関係をあぶり出すものとまずは捉えられるだろう。

その一方で、本作には『芸術と手術』（1924）や『最後の人』（1924）など、無声映画期からトーキー初期に実際に製作された映画への参照が作品全体に散りばめられている。本発表は、これらの映画と小説の物語との重なりやずれを検討し、間テクスト的に組み込まれた映画史の記憶が、史実とフィクションとの境界にある本作の語りを特徴づけている点を明らかにする。映画史および映画研究の知見を組み合わせることで語りの構造を詳細に分析する点が、本発表の先行研究に対する貢献である。

□頭発表：文学、文化・社会Ⅲ（10:00～11:55）

D 会場（A36）

1. ソロモンのトポスについて：近世ドイツ語圏の算術書を手掛かりに

大林 侑平

旧約聖書『列王記』に登場する賢王ソロモンに帰せられるテキストは偽典・偽書を含めて様々ある。その一つ『知恵の書』には含まれる有名な句「すべてを尺、数、衡によって定められた（*omina in mensura et numero et pondere disposuisti*）」はラテン中世のテキストで繰り返し引用され、「数の聖別」と呼べるトポスを形成した。これは近世にも多くの使用例が存在したことは先行研究の示すところである。それは数学的知識の自然哲学的な意味を正統化するものであった。

しかし本発表は、近世ドイツ語圏で出版された算術書に注目する。本発表は主に二つのことを示す。第一に示すのは、キリスト教世界で伝統的に卑俗とされた商業のための知識を正統化するための使用であり、ソロモンのトポスの別の使用が広く一般に存在したことである。算術書は普通学校で使用され、数の概念と基礎的な計算規則の導入、そして実践的な練習問題を収録しており、職人や商人になるであろう子どもたちが習うべき知識を提供していた。そして1522年以降半を重ね続けた、ドイツ語算術の親と顕彰されるアダム・リース（Adam Ries, 1492-1559）をはじめ、算術教科書の多くがソロモンのトポスを使用していた。第二に示すのは、ソロモンのトポスが商業社会に対する認識を映す指標として理解され

うることである。これは実際商人が用いる帳簿の教科書などにソロモンが現れることはなく、18世紀初頭をすぎると、算術書からもソロモンは姿を消していく事実によって示される。

2. ゲーテ『親和力』における風景描写 —叙述空間への没入と距離をめぐって

綾戸 啓太

ゲーテの『親和力』（*Die Wahlverwandtschaften*, 1809）については、自然科学・哲学・芸術・社会関係をめぐる諸問題を再現する「実験室」として捉える研究が蓄積されている（Hühn 2011）。また登場人物たちが同じ庭園風景に異なる意味を見出し、その認識のずれが悲劇的結末に結びつくことが指摘されている（Kaiser 2012）。本発表では、こうした研究を踏まえ、さらに語り手の視線と読者の没入経験に着目する。

庭園風景には、エドゥアルト・シャルロッテ・オッティーリエ・大尉の見出す意味のずれが映し出されている。しかし重要なのは、そのずれがいかに叙述されるかという点である。語り手は、上棟式の眺望や新しい家を望むエドゥアルト、湖を渡ろうとするオッティーリエなどの場面において、俯瞰的な視線と人物の視線・内面への没入とを交錯させる。この叙述構成は、読者を登場人物の視点へ引き込みつつ、語り手のイロニーによって一定の距離を保たせる（Blechsmidt 2011; Osterkamp 2020）。

さらに、シラーの風景芸術論「マティソンの詩について」やゲーテの風景詩「風景画家としてのアモール」を参照すると、当時の風景芸術をめぐる論点である、風景への没入と鑑賞者の距離との緊張関係が浮かび上がる。『親和力』の風景描写は、この関係を叙述形式として実現し、読者を没入と距離とのあいだに置くことで、作品の「理念」である「社会関係の摩擦」を経験させている。すなわち、庭園は単なる舞台ではなく、読者の視線を構成する「風景的ジオラマ」として機能しているのである。

3. ベッティ・パオリのフュトンにおける「社会的」という語の用法とその革新性について

杉山 東洋

一般的に「社会的」と訳される形容詞「ゾツィアール (sozial)」は、19世紀中頃にドイツ語圏で普及した (vgl. Geck: 1963, S. 23)。このドイツ語の用法に関する研究は、これまで階級間格差に焦点を当ててきた (厚東: 2020, 21~39 頁参照)。そのため男女間の不平等を論じた同時代テクストが扱われることは少ない。しかし実際には三月革命前後の時点で、「社会的生 (das sociale Leben)」 (Otto: 1843, S. 634) や「女性の社会的改革 (die soziale Reform der Frauen)」 (Dittmar: 1849) といった言葉で、女性の政治参加や経済支援が訴えられていた。その歴史的意義を踏まえたうえで本発表では、「社会的 (sozial)」という語が当時の女性作家によって、どう大手メディア上で用いられていたのかを問う。そ

の際、19 世紀オーストリアの文筆家ベッティ・パオリのフュトン¹を論及対象とし、彼女が拡大／縮小や選択といった「処置」が可能な「圏域」というイメージで女性の社会的な状況を把握していたことを明らかにする。

三月革命ののち、パオリは『プレッセ』紙のジャーナリストとなった (vgl. Wozonig: 2003, S. 59f.)。そして彼女は『この時代のある問題』(1965)、『ポンバルの言葉』(1866)、『知は力なり』(1869) といったフュトンで女性教育の必要を語りながら、「社会的な自由 (soziale Freiheit)」(Paoli: 2001, S. 82) を変更可能な圏域として構想していた。こうしたパオリの著述は「分割／共有問題がかたちをなす場」(ランシエール: 2014、235～236 頁) という現代的な「社会的なもの」のイメージを先取りするかのようであり、今なお注目に値するといえる。

□頭発表：文学、文化・社会Ⅳ (10:00～11:55)

E 会場 (A34)

1. 「植民地」の幽霊の現像

—ヴァックヴィッツの家族小説『不可視の地』に関して

徳永 恭子

2004 年に出版されたシュテファン・ヴァックヴィッツ Stefan Wackwitz の小説『不可視の地』*Ein unsichtbares Land* には「家族小説」という副題が付けられている。近年、大戦の記憶を物語る三世代ものの家族小説が続々と出版されているが、この作品も他の家族小説と共に「想起」の文脈において言及されることが多い。孫である語り手が、祖父の痕跡をアウシュヴィッツや旧植民地、ドイツ領南西アフリカまで追っていく。二十世紀の「記号」と化した地名ゆえに、この作品も一見すると、これらの地を舞台背景に歴史的出来事に巻き込まれる家族の物語を紡ぐ典型的家族小説の一つであるかのように見える。また実名が使われ、手記や家族写真が挿入されることから、ドキュメンタリー風の自伝であるかのようにも考えられる。しかしながらこの小説は物語性に重きを置く他の家族小説とは異なっている。時系列に沿った家族の物語は語られない。描かれる人物も個人としての輪郭を欠いた「不可視」の幽霊のようである。実際に幽霊のモチーフが至る所に散在している。そもそもこの「家族小説」は、人物としての家族を描くことを目指してはいないのではないか。本発表では、過去と現在を繋ぐもの、事実 (ドキュメンタリー) と空想 (フィクション) の間を橋渡しするものとして「幽霊」を考えるとともに、「不可視の地」がいかに描かれているのかを考察する。

2. 現実と空想の交錯する場所

—クレメンス・J・ゼッツ『丸いもののもつ慰め』にみる語りの機能

犬飼 彩乃

本発表は、オーストリアの作家クレメンス・J・ゼッツの短編集『丸いものの慰め』(*Der Trost runder Dinge*, 2019) を取り上げ、各短編で語りの要として効果的に使用されている、登場人物たちの存在する現実と空想の交錯する場所に注目することで、作家がとらえる認識と語りの機能を解明することを目的とする。

ゼッツは、長編小説『インディゴ』(*Indigo*, 2012) で虚実の混淆を、『ボット』(*Bot*, 2016) で人間と機械のコミュニケーション形態の相違をテーマとするなど、現代におけるコミュニケーションの変容や文学としての語りのありかたについて多くの執筆や発言をしてきた。本発表で扱う短編集は、現代オーストリアにおける個人の日常を切り取るような、現実と虚構の問題やデジタルテクノロジーとはテーマを異にする短編群にみえる。しかし、他者とは共有しえない知覚を持つ個人の孤独(M. Wolf, 2021) や、それでもなお求めてしまう共感や慰め(I. Hermann, 2021) といった本作に通底するテーマは、作家本人のこれまでの著作、講演(Setz, 2015, 2019 他) に照らし合わせれば、個々人が現実として知覚する世界とその虚構性を問題としてしていると解釈できる。個人の現実(もしくは空想)とは別の世界(もしくは他者が認識する別の現実)が存在しうるかもしれないという気づき、世界の矛盾が露呈する箇所を抽出し、グリッチ論や認識論を参照することで、ゼッツ作品で試みられている語りの機能を明らかにする。

3. ぼくの部屋、父の防空壕、母の壁

ーファルク・リヒターの〈家族劇〉におけるオートフィクショナルな語り

真田 健司

現代ドイツ演劇を代表する作家＝演出家の1人ファルク・リヒター(*1969) は、2020 年以降、自身の家族をめぐる作品を相次いで制作している。本発表は、これらの〈家族劇〉に通底するモチーフの生成と変遷を通時的に辿ることで、これまで個別の作品との関連(Saftig 2024, Edy 2025) でのみ捉えられてきたリヒターのオートフィクションの軌跡と多様性を素描することを目指す。

まず『氷の下』*Unter Eis* (2004) に胚胎した〈家族劇〉の原型は、双子劇 *My Secret Garden* (2010) および *Protect me* (2010) において本格的なオートフィクションとして展開する。両作品に登場する〈作者〉は、父の危篤を機に過去と向き合い、粗暴な父と過干渉に悩まされた少年時代を想起するとともに、その両親も戦争体験のトラウマを抱え、戦後の保守市民社会の同調圧力を受けてきたことを暗示する。さらに *Small Town Boy* (2014) では、閉鎖的な故郷からの「逃亡」が、作者のゲイとしてのアイデンティティに起因することが明らかになる。

その後、同一のモチーフは、父(たち)との関係を男性性の観点から探究するアンサンブル劇 *In My Room* (2020)、モノドラマとセルフドキュメンタリーを組み合わせた *The Silence* (2022)、シェイクスピアの悲劇をメタドラマ化した *Lear* (2023) と、異なるフォー

マットにおいて繰り返し変奏されていく。これらの〈家族劇〉は、亡き父および存命の母に声を与えることで、それまで語られなかった物語を綴るとともに、世代間の葛藤を歴史的文脈に位置づけ、現代社会におけるパートナーや家族や帰属の問題を多角的に照射する試みにほかならない。